ですよ。少しづつ大きくなるんですね、そりゃあ石が大きくなるなんていったって、目に見えやしませんが、確かに育つんだというんです。それで土浦の地盤が少しづつ上がるんだというんですよ。そのじいさんがね。はーあ、そうかなと思って聞いていたんですが、成程、土浦の地盤は段々先へ伸びていくんですね。今の鉄道のすぐ裏は霞ケ浦だったんです。それがいつとはなしに地面が上ってしまった。これは砂利が生きている証拠らしいんですよ。今の蓮河原は、段々々々湖の中へ伸びていったんですよ。あそこの砂利の層は四間も五間もあるんですからね。これはただ砂利が川に流されてたまっただけじゃないと思われるんですよ。

さて　下田町のあたりにはまこもが生えて浮き間を作るのに格好の場所だったわけですが、なにしろ番所は誰も近づかないから、野鳥のいい餌場だったんです。だから「下田の落雁」と言って江戸時代から有名でしたよ。

その沼番をしたのが私の祖先です。つまり土屋様から鳥をとる不心得者がいないように番を申しつけられていたんですね。だから私の家には火縄銃なんかが四五丁あった。他の人にはとらせないけれども、自分では鉄砲でぶって、少し殿様に上げて、あとは自分で食べたらしいですよ。家の横に毛をむしる小屋がありました。その家というのは今の田宿裏ですが、そこから下田町、田中一帯、桜川の向うまで何もなかったわけですから、よく見通しが効いたんですね。明治になっても、私のじいさまは火縄銃で雁をとったことを覚えています。鉄砲ぶちの名人でしたよ。百姓がね、雁が降りたよ、おじいさん、なんてわざわざ知らせに来るんですよ。そうすると、じいさんは鉛を七輪の火で溶かして、型に流して、大きい丸を一発こさえたんです。散弾だと鳥が安くなるんでしょう。食ってもうまくない。だから一発弾を作るわけですよ。鳥が降りてから作るんです。それでも間に合ったんですねえ。そして鉄砲をかついで舟に乗って行ける所まで行って、それから浮き間の上をナーバという下駄をはいて近寄って行って射ったわけです。一発しか弾がなくて、それでとったんですから、名人だったんですね。

あの頃と比べると、土浦も全く変りましたよ。

……（終）……